「みち」と建築の関係

海外出張報告 3

川島和彦

パリ・モントルグイユ地区の可動式の車止めで遊ぶ子どもたち

ウルムの大聖堂とシティハウス

2010 年 8 月下旬から 1 ヵ月間，ドイツ，フランス，モロッコを訪れました。街並み形成に着目した取り組みを視察することが目的でしたが，本稿ではとくに印象に残った 3 点を報告します。

まず，ドイツ・ウルムのシティハウスの存在です。ウルムには日本人観光客はあまり訪れていないように感じますが，世界一の高さ（約 161m）の塔をもつ大聖堂があることで知られ，また都市計画・まちづくりに対する住民の意識が高い都市ともいわれています。このウルムの大聖堂のすぐ隣に，リチャード・マイヤーが設計したシティハウスが存在しています。計画当初は住民の賛否の意見が激突し，住民投票まで行われ，ドイツ中がこの景観論争に注目したことで有名です。長年，大論争になりましたが，結局建設されました。大聖堂＋シティハウスの組み合わせは，竣工 1 年後に行われた市民アンケートで良好な評価を受ける結果となりました。竣工間もないころの真っ白に輝く姿はかなりのインパクトがありましたが，今でもその姿は変わりません。シティホールは市民・観光客の両方にとって必要な情報センターの役割，展示場の役割，飲食のできる場所としての機能を果たしており，違和感なくまちにとけこんでいます。かつて建設担当の市長にインタビューさせていただいたときの市長の自信満々な表情を思い出しました。

次に，パリの典型的な下町とされるモントルグイユ・サン・ドゥニ地区における歩行者専用区域創設による界隈づくりを取り上げたいと思います。この地区は，商業系機能の過度の集中と交通問題等に起因する人口減少に対処する必要があったところです。居住系機能の改善を優先して界隈の活力ある印象を与えること，歩行者専用区域を創設することなどが実施され，まちの低層部は近隣商業の店舗が連なり，その上部は住宅として整備されました。低層部の店舗には八百屋，肉屋など生活に密着した店舗から活気が感じられるにとどまらず，清掃車などの必要な車以外は通行しないことから道に大きくせり出したカフェで多くの人たちの談笑する姿，そして子どもたちが走りまわる姿が見られるようになっていました。いきいきとした日常の姿を見ることができました。

最後に，モロッコ・フェズのメディナです。世界最大の迷路都市と呼ばれるほど，フェズのメディナ＝旧市街における曲がりくねった道と高密な建物で構成される空間は中世の趣をそのままに残しており，世界遺産にも登録されています。メディナは，店舗が並ぶメインストリートと，わき道からまさに迷路のように広がる住宅地，そしてイスラム文化の中心であるモスクが中心的な位置に点在するなど，全体像を把握するだけであれば比較的シンプルで理解しやすい構成になっているともいえます。メインストリートは同じような店舗の空間構成が続き，店の外へのあふれ出しが見られる等の構成はアジア諸国にも見られる形態とも似ています。しかし，住宅地のほうへ入り込めば，高い壁の連続で，圧迫感しか感じない空間が連なっています。そのうえ，道が曲がりくねっていることから自分がどこに位置しているのかは外部の者にはわからないほど複雑です。このメディナにも居住している人たちがいます。モスク前には体を清める水場があり，毎日定期的に利用されていること，沿道にわずかでも座るスペースがあればそこに座って談笑していること，子どもたちは細い幅員の街路空間でもサッカーをしています。ロバがモノを運んでいます。あげればきりがないほど，街路空間も人々の日常生活の場として機能している姿がそこにありました。

あらためて，「みち」と建築の関係のあり方を考えさせられる 1 ヵ月となりました。

（かわしまかずひこ・専任講師）

（上）フェズのメディナの全景
（右）メディナの住宅地内の一部